

子どものための発育発達過程に沿った運動実践の普及に関する研究（２）

和久田佳代 ^{*,1)}、武田真理子 ²⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学、²⁾ 聖隷クリストファーこども園

目的

発育発達過程に沿った呼吸、寝返り、腹這い、四つ這い、高這いなどの運動は、体力低下、運動不足が懸念される現代の子どもたちが継続的に実践することで、重力に適合した姿勢と運動を身につけるために有効であると考えられる。その実践例として「コアキッズ体操」や「さくら・さくらんぼのリズムあそび」がある。附属認定こども園において、発育発達過程に沿った運動遊びを積極的に取り入れる保育実践を継続し、その効果を検証することを目的に体力測定（日本幼児体育学会方式）を実施する。

方法

（１）聖隷クリストファーこども園においてコアを意識した実践を継続し、2015年2月に年長児の健康調査・体力測定、年中児の健康調査を実施した。

（２）「さくらさくらんぼのリズムあそび」を日常的に実践している浜松市内A保育園の見学、保育参加を行った。

報告

（１） 聖隷クリストファーこども園における実践

2014年度は研究主題を「主体性・自己肯定感・魅力的な環境の3つの視点より、子どもが自ら体を使った遊びに取り組もうとする姿を捉え、保育方法を探る」として、取り組んできた。研究目的の一項目は「子どもの姿を基に、遊びの中で魅力的な保育計画と環境を構成し、子どもの運動あそびを実践する」である。

日常保育の中に、コアキッズ体操、正しい姿勢で座ること、集団ゲーム、里山体験活動を意識して取り入れ、積極的に戸外遊びをし、室内遊びでもごっこ遊びの中に運動的要素を取り入れた。この2年間の取組を通して、保育の中にコアを意識した運動遊びが定着してきた。このような保育実践をもとに2015年2月10日に「2014年度浜私幼共同研究協力園」の公開保育を実施した。

（２）浜松市内A保育園における「さくら・さくらんぼのリズムあそび」を視察

2015年2、3月、「さくら・さくらんぼのリズムあそび」を日常保育に取り入れている浜松市内A保育園を見学、保育参加した。毎日の生活の中に自然とリズムあそびの時間が設定され発育発達過程に沿った運動が行われていて、子どもたちは姿勢も動きもよく、このような意図的な時間が必要であると考えられた。

課題

こども園における体力測定は2年めであり、今後も定期的に運動能力検査を実施し客観的な分析を行っていく必要があると考えられた。この2年は年長児の体力測定を実施したが、年中児も実施し課題を分析し、その1年後、年長児になって測定することができればより効果的な指導につながれると考えられる。また、保育士が自信を持って運動あそびが支援できるように、継続的に運動あそびに関する研修を実施していくことが必要であると考えられた。

発表状況

1) 和久田佳代「発育発達過程に沿った運動あそびの支援ー附属こども園における取組からー」日本幼児体育学会第10回大会にて発表、2014年8月早稲田大学

2) 和久田佳代「子どもが良い姿勢を身につけるために」『教育と医学』741号 p. 222-229、2015年3月